——

なぜだろう！
いや
ひょっとしたら
物体ではないのかもしれない。

人々

二C 遠藤公嗣

I

茫漠たる荒野である。
見渡す限りの地平線である。
地平線を、遮る物は何もない。
地平線を、切り放す物も何もない。
灰色の空には力ない赤い太陽が一つ掛かっている。
総ては茶色と、そして灰色の中にある。
死の静寂の中に地平線だけが、総てを二つに分けている。

II

数知れぬ人々が進む。
彼らはまったく無言である。
この荒れつくした荒野を
死の静寂の中を、
彼らは進む。

足音がきこえる。
大きな足音。耳に響く。弛みない動き。
しかしそして静。進むのみ。

彼らはどこへ、
彼らはなぜ、
そして彼らは——。

彼らには見えない。ただ進むのみである。
地平線の彼方の無限の可能性を信じ。

III

指導者がいる。
彼は彼らに教えなければならない。
彼らの行く手を、
どこへ、
なぜ、
そして彼らの——。
指導者は教える。
彼らが進むということを始めて以来、
一時の休みもなく、
指導者は教える。

が、指導者のそれは絶対でない。
それは、
指導者も彼らの一人であるから。

しかし、指導者の努力は無駄ではなかった。
長い年月の間に、
彼らの行くべき方向は解らないまでも、
行くべきでない方向が解ったのだ。

彼らは時として間違う。
指導者がその方向を誤る時、
彼らはその進む方向を失う。
しかし、彼らはいつかは再び進みだすであろう。
彼らは進まねばならず、
また、
新しい指導者によって、
新しい方向が示されるであろうから。

IV

彼らは進む
川、
谷、
崖、
そして、
あらゆる誤った思想を乗り越えて。
行く手の無限の可能性を信じて。

目次

表紙	1A 井上和美	
○巻頭言		
卒業生を送る	学校長 南勝一	一
○卒業によせて		
卒業生諸君よ、大志をいだけ	教官 松田章	三
柳	教官 山本英夫	四
生きたことば	教官 内藤靖章	六
お任せします	3B 御船洋	六
みなさんに	3D 瀬尾幾郎	七
ぼくの中学時代に芽ばえたもの	3D 山崎秀夫	八
卒業の日	3E 小林誠	一〇
故岸本伸秀君をしのぶ	教官 松田章	一一
先輩に思う	2A 植本洋雄	一三
三年生の皆さんへ	2C 湯浅信一	一四
卒業生の皆様へ	2E 斉藤敬子	一四
卒業生の方々におくる	1A 吉田修	一五
三年生の皆様へ	1E 松本潤子	一六
○養護学級の思い出		
大山登山	山本正典	一七
ボールが受けられた日	高畑進	一七
思い出	丸山拓	一八
職場実習の反省	井上正志	一八
カバヤの実習	西岡武則	一九
聖火リレー	金原秀人	一九
大山登山	井上豊久	一九
餅たべの新記録	小林健一	二〇
三年間の思い出	石川嘉子	二一
○秋の遠足		
秋の遠足—姫路—	3A 坂本良平	二一
書写山	3B 五藤正美	二二
姫路城・書写山	3C 谷口真砂子	二三
書写山	3D 船曳礼子	二四
山道で	3E 武田勉	二五
○自由作品		
〈作文〉		
楽しいひととき	1A 服部利也	二六
整理	1A 岡本優子	二六
私	1B 藤岡京子	二七
ああ、キューちゃん	1C 小林幸子	二八
思い出の大山登山	1C 内海昌彦	二九
読書	1D 長岡節子	三〇
バス通学の感想	1D 清水健治	三一
熱帯魚	1D 安田英彦	三二
祖父の死	1D 島村長利	三二
ある日の夜中	1E 今井茂樹	三三
おばあさんへ	1E 宇多川直子	三三
ある日の記録を見て	2A 藤田康子	三四
寒げいこ	2B 近藤穂積	三五
SINH	2B 島田道子外	三七
姉妹	2C 山崎愛子	三八
今を美しく	2D 小林明子	三九
My Diary（ぼくの日記）	2E 葛原直樹	四〇
読書に親しもう	2E 内藤康裕	四一
「ボクは動きたい」を読んで	2E 伊藤雅江	四二
ぜひ読んでください!!	3E 里見信正	四三
〈詩・俳句・その他〉		
のら猫	1B 福田量子	四五
メリーの死	1B 奥山高文	四六
人間	1C 時岡宏明	四七
二月の夜中	1D 山田緑	四七
試験の前	1D 山田緑	四七
俳句	1E 道広嘉隆	四七
朝	1E 常重吉正	四七
笑い話	1E 平田恭子	四八
ある日曜日の早朝	2B 安井明子	四八
宇宙への疑問	2B 横川清	四八
人々	2C 横川清	四九
とんび	2D 遠藤公嗣	五〇
俳句七句	3E 榊原善朗 / 松本卓史	五〇
○カメラ訪問		
大山の思い出	2C 布角始生	五一
○習字		
紅梅の一枝	1C 谷本泰子	五三
律動美	1C 川上恵子	五三
○数官及び卒業生の名簿		五三
○二、三学期の行事		五九
編集後記		六二

操麓

41

昭和40年3月20日発行

岡山大学教育学部附属中学校生徒会編集　（非売）